宮城県仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用法

玉懸　元

キーワード：終助詞，ッチャ，用法，仙台市方言，共通語化

要　旨

本稿では，若年層を話者とした調査結果に基づき，仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用法を整理して記述する。「ッチャ」の用法は，用例の観察を通して，次の①②③に整理される。①対話用法A：そもそも知っているはず・分かるはずの事柄を忘れている・気付いていない，ということが相手から看取された場合に，その事柄を取り上げて「ッチャ」を使用する。②対話用法B：相手のそもそも知っているはず・分かるはずの事柄を，後続させる発話内容の土台になることとして取り上げておきたい場合に，その事柄を取り上げて「ッチャ」を使用する。③独言用法：自分自身がある事柄を思い出した・ある事柄に気付いたといった場合に，その事柄を取り上げて独言的に「ッチャ」を使用する。③は①を自己内対話的に拡張したものとしてその関係が理解される。また「ッチャ」の本質を把握することによって，①と②との関係も理解される。

なお，以上のような記述を通して，現代方言において共通語化を免れている方言形式の具体的様相とその理由に関する問いに対して，ひとつの見通しが得られることになる。

1．本稿の目的と位置づけ

1.1　本稿の目的

宮城県仙台市の特に若年層では，現在，いわゆる共通語化の進行が著しい[注1]。ところが，そのような中で，玉懸（2000）で多人数調査の結果から明らかにしたように，「ッチャ」という方言終助詞は，老若を問わずなお根強く使用され続けている[注2]。

この終助詞「ッチャ」に関する記述的な研究は，これまで十分になされてきたとは言い難い。古くは菊澤（1934）・土井（1936）・藤原（1952），比較的新しくは浅野／編（1985）・藤原（1986）等に「ッチャ」に関する言及があるが，いずれも「ッチャ」を中心的関心においた論考ではないため，記述は直感的・断片的なものにとどまる感が否めない。そこで，本稿では記述的な立場から，「ッチャ」とはいかなる場合に使用し得る終助詞なのか・いかなる要因によってその使用の可否を決定されているのか，といった問題について考察する。一口に言えば，仙台市方言における終助詞「ッチャ」の用法を整理して記述す

ることが本稿の主たる目的である。[注3]

本稿で採用する用例は，当地域の若年層――A氏(1973年生まれ，生え抜き，男性)・B氏(1976年生まれ，生え抜き，男性)・C氏(1967年生まれ，4歳から仙台市，男性)――を話者として，1998年4月から10月にかけて筆者が行なった面接調査の際に得られた用例，および自然談話からの採取例と筆者(1974年生まれ，生え抜き，男性)による作例である。採用した用例については，すべてA・B・C氏によるチェックを経ている。分析は主に筆者の内省によるが，A・B・C氏らの内省も参考にしている。なお，筆者は，高年層の話者を対象とした調査を現在なお継続中である。世代間の用法の細かい差異等についての検討は，その結果の整理が終わり次第行ないたい。

1.2　本稿の位置づけ

方言終助詞研究は，藤原（1982，1985，1986）に代表される網羅的・概略的な記述的研究の段階を経て，現在，個別的研究に関心が寄せられている。井上優は，井上(1995)およびその後の一連の終助詞研究において，富山県砺波方言の終助詞を網羅的にではなく一個もしくは少数ずつ取り上げることにより，その個々の終助詞の意味・用法を精細に分析・記述してみせた。[注4] 小林（1999）・渋谷（1999 a，1999 b）らもまた，その大局的な目標に違いはあれ，同様の方途により方言終助詞の分析・記述を行なっている。

井上優(1998)は，終助詞を個別に取り上げることの将来的な意義に関して，次のように述べる。

> 終助詞については，各地方言の終助詞の意味記述に役立つ分析的概念といえるものはほとんど抽出されていない。(中略) このような状況にあってまず必要なのは，終助詞というものの意味記述に役立つ分析的概念の抽出を念頭におきながら，個々の終助詞の意味を母語話者でない人にもわかるような形で記述する作業を蓄積することである。(井上優 1998：122)

本稿は，「ッチャ」という終助詞を個別に取り上げる点でも，またその将来的展望の点でも，基本的に井上に与するものである。だが，本稿はさらに，次のような展望も抱いている。つまり，全般的に共通語化の著しい地域においてなお根強く使用され続ける個々の方言形式の記述を通して，次のような課題に対する具体的な手掛かりが得られるのではないか，という展望である。

（1）　方言のどのような面が共通語化しやすいのか(逆に，共通語化しづらいのか)，そのような面が共通語化しやすい（または共通語化しづらい）のは何故なのか。

方言研究におけるひとつの重要なキーワードである共通語化という過程がことばのすべての面において一様に進行するわけではないということは直感的にも明らかなところと思われるが，その具体的様相と理由を問う(1)は，より多くの事例の分析・記述を通してさらに検討すべき課題であろう。既に述べたように，「ッチャ」は，共通語化の著しい仙

台市という地域にあってなお世代を問わず使用される方言形式である。そのような「ッチャ」を取り上げて記述する本稿は，将来的にこの(1)のような課題を検討していくための資料としての位置付けをも与え得るものと考える。言い換えれば，本稿は，共通語化といった現代方言の社会的状況と，記述的方言研究とを，より有機的に連係させていくことを念頭におきながら，個々の方言形式について記述する試みの一環でもあるわけである。

本稿は以下，次のように構成されている。2．では「ッチャ」の統語的特徴を簡単に整理する。3．は本題にあたる節で，「ッチャ」の用法についての記述を行なう。4．は本稿のまとめであるが，今後の発展を見据えて，上に述べた(1)の課題に対するある見通しをも併せて述べる。

2．終助詞「ッチャ」の統語的特徴

ここでは，終助詞「ッチャ」の統語的特徴を簡単に整理しておく。まず，「ッチャ」は，

(2) *オレ　コレカラ　買イ物ニ　行クッチャガ　オメモ　行クカ？

のように，いかなる要素を含み込み得るかに関して最も自由度の高い従属節である「～ガ」型の従属節の内部にすら入り込むことができない。また，

(3) *ソシタラッチャ　眠クナッテシマッテッチャ……(cf. そしたらね，眠くなってしまってね……)

のように，「ッチャ」に間投用法はない。「ッチャ」が立ち現れるのは必ず文末である。

文末において「ッチャ」は，まず，用言または用言＋助動詞の終止形に接続する。その用言（＋助動詞）の終止形がル語尾を持つ場合，そのルが省略されることも多い。

(4)　書クッチャ／泣カセルッチャ／暑イッチャ／静カダッチャ

(5)　見エッチャ (cf. 見エルッチャ)／笑ワレッチャ (cf. 笑ワレルッチャ)

「ッチャ」は，いわゆるモダリティの助動詞類にもかなり自由に接続することができる。ただし「ダロー」に接続するのは不自然に感じられる。これは，「ダロー」は方言形「ベー」に対する共通語形であるという意識が強いため，方言形「ッチャ」との間で文体的に不適合をきたすためと思われる。[注5]「ベー」に接続するには問題がない。

(6)　来ルカモシンネッチャ／来ルニチゲーネッチャ／来ルヨーダッチャ／来ルラシーッチャ／来ルミテーダッチャ／来ルソーダッチャ

(7)　??来ルダローッチャ／来ルベッチャ

「ッチャ」は，また，名詞＋「ダ」に接続する。

(8)　花ダッチャ／三角形ダッチャ

「ッチャ」に後接し得る終助詞は限られている。ごく自然に後接し得る終助詞は「ネ」「ナ」である。「ヨ」「サ」「ゾ」「ゼ」「ド」「ッシャ」などは後接しない。「ヤ」「ワ」の後接は，あるかもしれないが，[注6]少なくとも安定した形ではないようである。

(9)　来ルッチャネ／来ルッチャナ

(10)　*来ルッチャヨ／*来ルッチャサ／*来ルッチャゾ／*来ルッチャゼ／*来ルッチャド／*来ルッチャッシャ

(11)　?来ルッチャヤ／?来ルッチャワ

最後に，文体的な点についても付言しておくと，「ッチャ」は基本的に対等の相手あるいは目下の相手に対して用いられる。したがって，

(12)　??花デスッチャ／??行キマスッチャ

のように，丁寧体「〜デス」「〜マス」との接続は非常に不自然である。

3.　終助詞「ッチャ」の用法

ここから，本題であるところの終助詞「ッチャ」の用法についての考察に移る。考察の手順としては，はじめに，できるだけ客観的な観点から「ッチャ」の用例を類別する(3.1)。そのような類別を施した上で，類別されたそれぞれについて具体例の観察を通してその用法を把握していく(3.2, 3.3)。さらに，整理されたそれぞれの用法の関係を考える(3.4)。

3.1　終助詞「ッチャ」の用例の類別

終助詞「ッチャ」の用例を見渡すとき，それらはテクストの性質およびそのテクスト内での位置という観点から，次のように類別される。

(13)　終助詞「ッチャ」の用例の類別

- (イ)対話的テクストでの用例
  - (イ・1)隣接対第2発話相当位置での用例
  - (イ・2)隣接対第1発話相当位置での用例
- (ロ)非対話的テクストでの用例

すなわち「ッチャ」の用例は，まず，それが聞き手としての他者に向けられた発話であるか，それとも聞き手となる他者の存在を必ずしも前提としない独言的な発話であるかによって，それぞれ対話的テクストでの用例(イ)と非対話的テクストでの用例(ロ)とに大きく二分することができる。前者(イ)は，さらに，それが相手による何らかの発話を受けての発話であるか，それとも自ら何らかの話を持ち出そうとする際の発話であるかによって，隣接対（adjacency pairs）の第2発話相当位置での用例（イ・1）と第1発話相当位置での用例（イ・2）とに二分できる。以下，この分類に沿ってそれぞれの「ッチャ」の用例を観察し，その用法を考察する。

3.2　対話的テクストにおける終助詞「ッチャ」

3.2.1　隣接対第2発話相当位置における終助詞「ッチャ」

ここでは(13)の（イ・1）にあたる用例を扱い，その用法について考察する。具体例を見ていこう。なお，例文中の「↓」と「↑」は，それぞれ下降調・上昇調のイントネー

ションを表わす。

(14)　(甲・乙は同居の兄妹)

甲：兄チャン　和英辞典　ドコダッケ

乙：居間ノ　本棚ダッチャ↓

(15)　(甲・乙は，先週の日曜日に一緒に釣りへ行った)

甲：コナイダノ　日曜ッテ　何(なにして)シッタガナヤ

乙：釣リサ　行ッタッチャ↓

このような用例を見ると，すぐに次のようなことに気付く。すなわち，「ッチャ」は相手の質問に対して答える際の発話において使用されている。このことは，「ッチャ」の使用の可否が決定されるに際して関与的だろうか。つまり，「ッチャ」は相手の発話が質問であるときそれに答える発話において使用される，受けた発話が質問でなければ使用されない，と言ってよいだろうか。否。次のような例を見てみよう（例文中の「//」は，そこで次の話し手による割り込みが行なわれたことを表わす)。

(16)　甲$_1$：オトトイ　オメト　会ッテ　話シタアドニサー　ナンカ　オレ//

乙　：ン。イヤ。アレワ　サキオット(さきおととい)イダッチャ↓

甲$_2$：ア　ソッカ。マー　トニカク　ソノアドニサ（以下略)

このような場合，「ッチャ」は相手の何らかの質問を受けて使用されているわけではない。したがって，受けた発話が質問であるかどうかという区別は，「ッチャ」の使用の可否に本質的に関与してはいない。

今挙げた(16)をも交えて上掲例を観察すると，次のようなことが分かる。つまり「ッチャ」の話し手は，そもそも知っているはずの事柄（これをXとしよう）を今・この場においては忘れている，といったことが看取される相手の発話を受けた際に，そのXを取り上げた「Xッチャ」という形で「ッチャ」を使用している。具体的に言うと，例えば(16)では，「甲と乙が会って話したのは一昨昨日であること」を忘れていることが看取される相手の発話を受けて，「あれは（＝僕と君が会って話したのは）一昨昨日だッチャ」と「ッチャ」が使用されていることが見てとれよう。

以上の観察からは，次のような仮説が立つ。

(17)　仮説1：終助詞「ッチャ」は，そもそも知っているはずの事柄Xを今・この場では忘れている，ということが相手から看取された場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。

では，ある相手がある事柄に関して質問してきたとして，その相手が当の事柄に関して何ら関与的な知識を持たないような場合，応答としての発話に「ッチャ」は使えないのだろうか。ここで，それぞれ上掲の(14)(15)と対比される次の例を見られたい。

(18)　(甲は乙の家にめずらしく遊びに来たいとこ。なお，この対話の現場は「居間」ではない)

甲：ネー　和英辞典　ドコ

乙：⁇居間ノ　本棚ダッチャ

(19)　(乙は先週の日曜日における自分の行動を甲に対してこれまで報告していない)

甲：コナイダノ　日曜ッテ　オメ　何シッタノヤ

乙：⁇釣リサ　行ッタッチャ

これらの例(18)(19)をそれぞれ(14)(15)と対比すると，そもそも知る由もないような事柄に関して相手が質問してきたような場合，その応答としての発話に「ッチャ」は使えない，ということが分かる。具体的に先の(15)とここで挙げた(19)とを対比してみよう。先の(15)では，相手甲は「釣りに行ったこと」の共同行為者であり，したがって当然ながらそのことを知っているはずの人物である。この場合，「ッチャ」が適切に使える。一方，(19)では「釣りに行ったこと」は乙の単独行為であり，しかも相手甲はこれまでにその報告を受けていない。したがって相手甲は当然そのことを知らないはずの人物である。この場合，「ッチャ」が適切に使えない。(14)と(18)を対比しても同様のことが言える。なお，(18)の「ッチャ」が適切であり得るのは，甲が乙の家にめずらしく遊びにきた人物でありながら乙の家の和英辞典の所在をそもそも知っているはずと乙が考え得るような場合である。また，(19)の「ッチャ」がなんとか適切であり得るのは，乙が日曜日には何があっても必ず釣りに行くという習慣を持った人物であり，そのことが甲に了解済みであるような場合である。

こうしてみると，仮説1はかなりに確からしい仮説である。つまり，相手がそもそも当の事柄を知っているはずか・知らないはずかという区別が「ッチャ」の使用の可否にかかわっていると言えそうである。ところが，さらに用例を見渡していくと，次のような例に突き当たる。

(20)　甲：葉書　出シテーンダケド　コノヘンサ　郵便ポスト　ネーガ

(郵便ポストは，目に見える範囲にある)

乙：ンー。アソコニ　アルッチャ↓

(21)　甲：マサオ　ドコ　行ッタガ　知ラネー？

(マサオは，目に見える範囲にあるグラウンドを走っている)

乙：ホレ　アソコ　走ッテッチャ↓

このような場合，相手が“そもそも知っているはずのことを今・この場においては忘れている”のだと言えるだろうか。「ッチャ」を使用している話し手はそのように捉えた上で「ッチャ」を使用しているのだろうか。否。例えば(20)では，「アソコ」に郵便ポストがあることを相手がそもそも知っているはずと捉えるにしろ，知らないはずと捉えるにしろ，「ッチャ」の使用は適切なのである。(21)も同様。

ここで即座に仮説1を却下してしまう前に，(20)(21)をもう一度観察してみよう。確かにここで，相手がそもそも知っているはずのことを忘れているとは必ずしも言えそうにない。だが，尋ねずとも分かるはずのことを聞いているとは言えそうである。つまり

(20)の“最寄りの郵便ポストの所在地”，(21)の“マサオの居場所”といった事柄は，それが現場における可視的な事実である限り，他者に尋ねずとも分かるはずの事柄である。

以上のような観察から，次のような仮説が立つ。

(22) 仮説2：終助詞「ッチャ」は，尋ねずとも分かるはずの事柄Xに現時点では気付いていない，ということが相手から看取された場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。

なお，自分にとっては現場を見渡せば分かることであっても，それが相手にとっては何らかの事情により可視的でないとき，「ッチャ」の使用は許容されない。この事実は，仮説2を支持している。

とすると，仮説2にもまた確からしさがある。つまり，相手が当の事柄について尋ねずとも分かるはずか・分からないはずかという区別が「ッチャ」の使用の可否にかかわっていると言えそうである。

さて，以上で立てた仮説1と仮説2とは，互いに排他的だろうか，それともまとめることが可能だろうか。排他的ならば，もう一度立ち戻って考え直すか，別個の用法として扱うことになる。一方，まとめることが可能ならば，両者をまとめてしまってもよいだろう。ここで，両者の違いを考えてみよう。両者は，要するに次のような点で違っている。すなわち，仮説1が「(当の事柄が相手の) 知っているはずのことか・知らないはずのことか」を「ッチャ」の使用の可否を決定する要因として挙げているのに対して，仮説2は「(当の事柄が相手の) 分かるはずのことか・分からないはずのことか」をその要因として挙げている。さて，このような違いを持つ両者はまとめることが可能か。

両者はまとめることが可能である。なぜなら，「知っていること」と「分かること」との違いはそれを今・この場での非潜在的な意識下に置くための手続きの違いにあり，いずれも，今・この場での非潜在的な意識として持つことが可能な事柄であるという点では同一だからである。

そこで，仮説1と仮説2をまとめると次のようになる。

(23) 仮説3：終助詞「ッチャ」は，そもそも知っているはず・分かるはずの事柄Xを，今・この場では忘れている・気付いていない，ということが相手から看取された場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。

このような見解に立つとき，やや複雑にはなるが，次のような例もまた妥当に説明が可能である。

(24) (甲は，これから煮る煮物の鍋に入れる水の量を調節している)
甲：ネー　水　コンックライデ　イーカナー
(鍋に入れられている水の量が少ない)
乙：イヤー　コンデワ　焦ゲツクッチャ↓

この例で，話し手乙の言う「このくらいの水の量で煮てはこの鍋が焦げつくこと」は，

相手甲のそもそも知っていることとは勿論言えない。当の鍋が実際に焦げつくかどうかは未来に託されているからである。しかし「どのくらいの水の量で煮ると鍋が焦げつくか」に関する既得の知識と「当の鍋にどのくらいの量の水が入れられているか」という現場から得られる情報とから「このくらいの水の量で煮てはこの鍋が焦げつくこと」が相手甲に分かるはず，と考えることは何ら不自然でない。この(24)の話し手乙はまさにそのような捉え方のもとに「ッチャ」を使用したものと考えることができる。同様に，

(25)　甲$_1$：傘　持ッテガナクテ　イーノガ？
　　乙　：エ。傘？　イラナイヨ。ナンデ？
　　(甲，空模様を指差しながら)
　　甲$_2$：雨　降ッカモシンネッチャ↓

のような場合も，実際に雨が降るかどうかは相手乙はもちろん誰しも確実には知るところでない。だが，現場から見てとれる空模様より経験的に「雨が降るかもしれない」ということが相手乙に分かるはずだ，と考えることは不自然でない。この(25)の話し手甲は，そのような捉え方のもとに「ッチャ」を使用したものと説明付けることができる。

以上，上述(13)の（イ・1）にあたる「ッチャ」の用例を観察し，その用法として仮説3を導き出した。（イ・1）の「ッチャ」の用例で，この仮説3で説明付けられないものはない。このように（イ・1）の「ッチャ」の用例すべてを説明できる仮説3は認める価値がある。そこで，これを認めて対話用法Aと呼ぶことにしよう。

(26)　終助詞「ッチャ」の対話用法A：終助詞「ッチャ」は，そもそも知っているはず・分かるはずの事柄Xを，今・この場においては忘れている・気付いていない，ということが相手から看取された場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。

3.2.2　隣接対第1発話相当位置における終助詞「ッチャ」

次に(13)の（イ・2）にあたる用例を扱い，その用法について考察する。

(27)　(部屋の日当たりの話)
　　甲$_1$：オレノ　部屋　西向キ　ダッチャー[注7]↑
　　乙　：アー　ウン
　　甲$_2$：ダカラ　朝トガ　昼間トガ　ゼンゼン　ヒー　入ンネーヨワ

(28)　(甲・乙が共に通っていた学校のプールの温水シャワーが壊れていたことに関する話)
　　甲$_1$：アノ　扉　入ッテ　スクノトコサ　アッタノ　壊レデタッチャ↓
　　乙　：アー
　　甲$_2$：オレ　イギナリ　寒イ日ニ　ソレ　忘(わす)[注8]ッテテ　アレ　使ッテサ　シタラ　冷テー水　バーット　出デキテ（以下略）

このように「ッチャ」は自ら話を切り出す場合にも使用できる。では，自ら話を切り出す場合なら，取り上げる事柄がどんな事柄であっても「ッチャ」を使用することができるのだろうか。結論から言うと，できない。例えば(27)で，話し手甲は「甲の部屋が

西向きであること」を取り上げて「ッチャ」を使用している。だが，もしも相手乙が甲の部屋について何ら関与的な知識を持たないような場合，したがって甲の部屋が西向きであることなど知る由もないような場合，「ッチャ」の使用は許容されない。(28)の場合も同様。つまり，先に見た対話用法Aの場合と同様に，当の事柄が相手のそもそも知っているはずのことか・知らないはずのことかという区別が，ここでも「ッチャ」の使用の可否にかかわっているわけである。

では，相手が当の事柄について分かるはずか・分からないはずかという区別もまた，ここでかかわってくるのだろうか。次の例を見られたい（作例）。

(29)　（相手は五歳の子供）

甲：??$\sqrt{9}\times\sqrt{4}$は，6ダッチャ

このように，相手が当の事柄について分かるはずもないような人物である場合，「ッチャ」の使用は許容されない。つまり，自ら話を切り出す場合の「ッチャ」についても，当の事柄が相手の分かるはずのことか・分からないはずのことかという区別が，使用の可否に関与しているのである。もしも(29)の「ッチャ」が適切であるとすれば，相手の子供が五歳にして既にルートという数学的概念を習得している（かつ甲がそのことを了解している）といった，きわめて特殊な文脈が必要である。

こうして(イ・2)にあたる用例を観察してくると，これらはおおよそ対話用法Aの「ッチャ」に準じて把握することができそうである。が，ここで指摘しておかなければならないことがある。

(30)　甲$_1$：オレノ　部屋　西向キ　ダッチャー……
　　乙　：アー　ウン
　　甲$_2$：（無言）……　　??

ここで，相手乙は「甲の部屋が西向きであること」を了解済みの人物だったとする。とすれば，甲の発話（30甲$_1$）での「ッチャ」の使用の仕方は適切なはずである。だが，甲がこの発話に続いて自らは何も発話しなかったとしたら，テクストの連鎖としてたちまち不自然な使用の仕方になってしまうのである。また，次のような事実も指摘できる。

(31)　甲$_1$：ナンカ　今年　ヤータラ　梅雨　ナガイッチャー……
　　乙　：アー　ナガイネー
　　甲$_2$：ア　ソーダ。ダイエーガ　イマ　安売リダヨ……　　??

ここでは，甲は（31甲$_1$）で「ッチャ」を使用した後，（31甲$_2$）で発話を後続させている。無言ではない。しかし，やはりテクストの連鎖として不自然なのである（ここで，「甲：なんか今年やたら梅雨長いね（乙：うん長いね）甲：あ，そうだ。ダイエーが今安売りだよ」といった展開が，唐突だが必ずしも不自然でないことに注意されたい）。

さて，このような事実は，何を物語っているのだろうか。――次のように考えることができよう。つまり，自ら話を切り出すときに「ッチャ」を使用するのは，「ッチャ」で

マークする事柄Xを土台とする内容を持った発話を後続させるというプランを話し手が用意している場合なのである。上記(30)のように，話を切り出す際に「ッチャ」を用いておいてその後無言であるといった展開が不自然なのは，「ッチャ」でマークする事柄Xを土台とする内容を持った発話を後続させるプランを持ちつつ使用するはずの切り出しの「ッチャ」の後に，何ら発話が続かないことによる。また，(31)の「ッチャ」が不自然なのは，「ッチャ」でマークする事柄Xを土台とする内容を持った発話を後続させるプランを持ちつつ使用するはずの切り出しの「ッチャ」の後に（少なくとも一見しただけでは）無関連な事柄が述べられていることによるのである。

以上を咀嚼してまとめると，次のようになる。

(32)　終助詞「ッチャ」の対話用法B：終助詞「ッチャ」は，相手のそもそも知っているはず・分かるはずの事柄Xを，後続させる発話内容にとっての土台になることとして取り上げる場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。

この(32)は，(13)の（イ・2）にあたる「ッチャ」の用例をすべて説明付けることができる。したがって，これは認める価値がある。そこで(既に先取りして(32)にそのように記したが）これを認めて対話用法Bと呼ぶことにしよう。

3.3　非対話的テクストにおける終助詞「ッチャ」

次に(13)の(ロ)にあたる用例を扱い，その用法を考察する。具体例を見よう。

(33)　(友人に電話をしたが留守だった。そして，その友人は現在旅行中であることを思い出した)

甲：アー　ンダ。アイツ　マダ　旅行カラ　ケッテネンダ(帰ってないんだ)ッチャ↓

(34)　(講義室に向かう途中，本日の講義は休講だったことを思い出した)

甲：ア　今日　休講ダッタッチャ↓

ここでは，自分自身そもそも知っていたはずのことを忘れていて，それを何かのきっかけでふと思い出した，といった場合に「ッチャ」が使用されている。また，

(35)　(道向こうに友人の“マサル”を見かけた)

甲：アレ　アレワ　マサルダッチャ↓

(36)　(これまで雑然としていたはずの本棚が，いつの間にか整理されていることに気付いた)

甲：オ　ズイブン　キレーニ　ナッタッチャ↓　本棚

のような例では，自分自身が今まで気付いていなかったことにふと気付いた，といった場合に「ッチャ」が使用されていることが分かる。

さて，こうして用例を観察してくると，これらの独言的な用例と先にみた対話用法Aとのある並行性に気付く。つまり，対話用法Aとは，ある事柄Xを忘れている・気付いていない人物が相手として実在していて，その相手に対して「Xッチャ」と語りかけるものであった。そのような対話用法Aとここで見てきた独言的な「ッチャ」の用例とは，

相手が外在する他者であるかそれとも内なる自分であるかという違いがあるだけで，構造として同一なのである。言い換えれば，独言的に「ッチャ」が使用される場合には，当の事柄を忘れていた・気付いていなかったところの自分自身が相手として見立てられている，と考えることができるのである。

独言的テクストにおける「ッチャ」の用例は，すべて，上に挙げた(33)(34)か(35)(36)かのいずれかのタイプに属している。つまり，独言的テクストにおける「ッチャ」の用例で対話用法Aの自己内対話的な拡張とみなせないものはない[注9]。そこで，これを認めて「ッチャ」の独言用法と呼ぼう。

(37)　終助詞「ッチャ」の独言用法：対話用法Aを自己内対話的に拡張したもの

3.4　終助詞「ッチャ」の各用法の関係

以上において，(13)の類別に沿って終助詞「ッチャ」の用例を観察し，その用法を①対話用法A・②対話用法B・③独言用法の三つに整理した。ところで，このそれぞれは互いに無関係だろうか。否。まず，①と③の関係については，既に3.3における考察の過程で自ずと明らかになったところである。つまり，③は①の自己内対話的な拡張として理解されるのであった。では，①と②とはどのような形で関係しているのだろうか。

これについて考えるためには，まず「ッチャ」とは本質的に何者かということを考える必要がある。そこで「ッチャ」の各用法から抽象化するとき，次のように言える。すなわち「ッチャ」とは，本質的には，

(38)　当の事柄Xが相手のそもそも知っていること・分かることのうちに含まれるはずだという話し手の捉え方を示す標識

である。このような把握に立つとき，対話的テクストにおける「ッチャ」の用法が何故に対話用法Aと対話用法Bなのか（何故にそれでしかないのか）ということが説明付けられ，両者の関係が理解される。つまり――，

一般に，相手のそもそも知っているはずの事柄や分かるはずの事柄とは，取り立てて述べる必要のないはずの事柄である。そのような事柄をわざわざ取り立てて述べる必要がある場合というのは限られている。それは，まず，相手が今・この場ではその事柄を忘れている・気付いていないということが明らかになった場合（これをC_1とする）であり，また，いわば前置きとしてその事柄を取り上げて確認を取っておくことで，後続させようとする発話内容のよりよい理解が期待される場合（C_2とする）である。(38)のような標識としての「ッチャ」が自然に使用され得る場合は，このC_1・C_2に応ずる。そこで，C_1に応じて対話用法Aが，C_2に応じて対話用法Bが成り立つのである。つまり，対話用法Aと対話用法Bとは，(38)のような標識としての「ッチャ」が自然に使用され得る典型的な2ケースにおける一方ともう一方に位置する形で関係している，と考えることができる。

4．おわりに——今後の発展を見据えて——

本稿では，仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用例を観察し，その用法を①対話用法A・②対話用法B・③独言用法の三つに整理した。それぞれを再掲しておく。

(26)　終助詞「ッチャ」の対話用法A：終助詞「ッチャ」は，そもそも知っているはず・分かるはずの事柄Xを，今・この場においては忘れている・気付いていない，ということが相手から看取された場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。(①)

(32)　終助詞「ッチャ」の対話用法B：終助詞「ッチャ」は，相手のそもそも知っているはず・分かるはずの事柄Xを，後続させる発話内容にとっての土台になることとして取り上げる場合に，「Xッチャ」という形式で使用される。(②)

(37)　終助詞「ッチャ」の独言用法：対話用法Aを自己内対話的に拡張したもの (③)

また，本稿ではさらに，それぞれの用法の関係を明らかにした。すなわち，③は①の自己内対話的な拡張として理解され，また①と②とは(38)のような標識としての「ッチャ」が自然に使用され得る典型的な2ケースにおける一方ともう一方に位置する形で関係している，と考えることができるのであった。

ところで，冒頭において，本稿が(1)のような将来的な課題を念頭においていることを述べた（次に再掲）。

(1)　方言のどのような面が共通語化しやすいのか（逆に，共通語化しづらいのか），そのような面が共通語化しやすい（または共通語化しづらい）のは何故なのか。

ここでは，以上での仙台市方言の終助詞「ッチャ」に関する記述を踏まえて，この課題にかかわる現時点でのひとつの具体的な見通しを述べておきたい。

仙台市に限らず現代の若年層は，頻繁に相手の同意を求めたり確認したりしつつ対話を進める手法を好む傾向が強い。昨今の若者ことばに特徴的と言われるいわゆる“語尾上げ”調の話し方や「じゃないですか」の用法の拡張といった現象[注10]もまたそのような傾向の反映として位置付けられよう。ここで「ッチャ」に関して注目すべきは，対話用法Bの存在である。対話用法Bは，相手のそもそも知っているはず・分かるはずのことを後続させる発話のための前置きとして取り上げ，いったんそれについての同意をとる用法と言い換えることも可能である。とすれば，終助詞「ッチャ」は，現代若年層の好む話し合いの手法にとって非常に有用なツールであるということになる。このような事情が，全般に共通語化が進んでいるはずの仙台市の若年層においてなお根強く方言終助詞「ッチャ」が使用されているという実態の背景にある，と考えられないだろうか。

以上を一般化して言えば次のようになる。

(39)　全般に共通語化の著しい地域における方言形式であっても，それが若年層話者の嗜好する意思疎通上の手法に適した面（「ッチャ」に関して言えば，同意要求の用

法）を有するならば，その方言形式は根強く使用され，衰退しづらい。

もちろん，これはあくまでひとつの仮説であり，より多くの具体的事例の分析・記述の積み重ねを通して検証されていかなければならない。その際，「ッチャ」とよく似た用法を有すると思われる他方言の諸形式（例えば，鹿児島方言など九州諸方言にみられる「ガ」，京阪諸方言の「ヤンカ」，等々）にも注意する必要があろう。が，本稿はこの仮説の提示をもってひとまず締め括りとしたい。

注1　仙台市の若年層では，語彙・文法的な面はもとより，大西（1992）・佐藤（2000）らが実証的に示すように，アクセント・イントネーションといった比較的変化しづらいと言われる面でも共通語化が進んでいる。つまり，全般的に共通語化現象が進行しているわけである。また，そういった現象面を裏付けるように，意識面でも“共通語志向”にあることは，多人数に対するアンケート調査の結果に基づいて小林（1995）が報告するところである。

注2　仙台市方言に現在行なわれる終助詞群を共通語のそれとの関連において簡単に整理しつつ列挙しておく。①共通語と外形が一致し，その他の特徴もほぼ同様と思われるもの：「ヨ」「ヤ」「ネ」「ナ」「ゾ」「ゼ」。②共通語と外形が一致するもののその他の特徴において何らかの異なりが認められるもの：「サ」「ワ」。③外形上共通語に存しないもの：「ッチャ」「ッシャ」「ド」。なお，東北方言全般に特徴的な「ベー」も繁く行なわれるが，これは，少なくとも現段階では典型的な終助詞とは認めがたい（玉懸 1999 に具体的に述べた）。以上①②③の終助詞についての詳しい考察は別稿に譲る。「サ」については，玉懸（2000）で扱っている。

注3　従来「用法」という用語は様々に使われている。この用語についての詳細な検討は別稿に譲らねばならないが，本稿では，ある形式のいわば「使用条件」にあたるものを用法と呼ぶことにする。「用法」という用語をどう定義するにせよ，そこで，「使用条件」だけは満たされるべき要件と考えるのである。

注4　井上のこのような試みは，現代語研究等において，いわゆる談話文法・語用論といった文以上の単位を扱う（広義）文法論への関心が高まり，それに伴って従来扱いづらかった品詞類（終助詞・感動詞など）の個々に対する分析・記述が積極的に行なわれるようになったという動向と無関係ではなかっただろう。

注5　仙台市方言の「ベー」については，玉懸（1999）を参照して頂けると幸いである。

注6　ただし藤原（1986：248）に「ッチャヤ」の例が挙がっている。再調査の余地がありそうである。

注7　対話用法Bでは，この(27)のように上昇調の文末イントネーションが被せられることも少なくない。しかし，次の(28)が非上昇調であることからも分かるように，これは義務的なものではないことを注記しておきたい。なお，対話用法Aでは，上昇調のイントネーションは許容されない。

注8　仙台市方言で「イギナリ（イキナリ／イキナシ／イギナシ等とも）」は程度副詞としても使われ，「とても」「非常に」といった意をも表わし得る。この例文における「イギナリ」はその用法である。仙台市方言の「イキナリ」については佐藤祐希子（2000）参照。

注9　理屈からすれば，対話用法Bが独言的に起こらないとは言えない（用例がないのは事実だが）。この問題は厄介な問題で，結局，どこまでを独言と認めるかを画定しない限り解決しがたい。今回の記述では，直感的にいわゆる独言と言えるか否かでもって，そう言えるものを

独言と呼んでいるに過ぎない。ただ，対話用法Bは，その後のテクストの展開を制御するという点で，より対話的テクストになじむ・非対話的テクストになじまない性格を持っていることは確かであろう。

注10　いわゆる“語尾上げ”については佐竹（1997）などに報告がある。また「じゃないですか」の用法の拡張については，同じく佐竹（1997）の他，井上史雄（1998）にも詳しい。

参考文献（主なもののみ）

浅野建二／編（1985）『仙台方言辞典』東京堂出版
井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店
井上　優（1995）「方言終助詞の意味分析――富山県砺波方言の『ヤ／マ』『チャ／ワ』――」『国立国語研究所報告110 研究報告集16』
井上　優（1998）「富山県砺波方言の終助詞『ジャ』の意味記述」『日本語科学』4
大西拓一郎（1992）「方言アクセントの現在――仙台市におけるアクセントの獲得を中心に――」『日本語学』11-10
菊澤季生（1934）「宮城県方言文法の一斑」『國語研究』2-4
木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
小林　隆（1995）「住民意識に見る方言志向・共通語志向」『言語』24-12
小林　隆（1999）「種子島方言の終助詞『ケル』」『ことばの核と周縁』くろしお出版
佐竹秀雄（1997）「若者ことばと文法」『日本語学』16-4
佐藤亮一（2000）「アクセント」小林隆／編『宮城県仙台市方言の研究』
佐藤祐希子（2000）「仙台市方言における『イキナリ』の多義性」『日本方言研究会第71回研究発表会発表原稿集』
渋谷勝己（1999 a）「山形方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1
渋谷勝己（1999 b）「文末詞『ケ』――三つの体系における対照研究――」『近代語研究』10 武蔵野書院
玉懸　元（1999）「仙台市方言の『ベー』の用法」『言語科学論集』3 東北大学文学部
玉懸　元（2000）「終助詞『ッチャ，サ』」小林隆／編『宮城県仙台市方言の研究』
土井八枝（1936）『仙臺の方言』春陽堂書店（国書刊行会から1975年に復刊）
藤原　勉（1952）「仙台方言」仙台市史編纂委員会／編『仙台市史』6（別篇4）
藤原与一（1982,1985,1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究　上・中・下』春陽堂書店

付記　本稿は，国語学会2000年度春季大会（於専修大学）での口頭発表を経て，その際の発表資料をもとに大幅な書き直しを行なったものである。質疑の際やその他の場において多くの方々が有益なご教示を下さったことに感謝したい。

――東北大学大学院生――

（2001年1月15日　第一稿受理）
（2001年3月27日　最終稿受理）